

《2018年8月（通算264回）月例会報告》

FIFA ワールドカップ^o討論会
—ロシア大会での事例をめぐって—

1. 日本 vs ポーランド戦における日本代表（西野監督）の選択について
中塚 義実（筑波大附属高校）
2. VAR（ビデオアシスタントレフェリー）の導入について
小幡真一郎（JFA1級インストラクター）
3. 「パブリックビューイング」をめぐって
松井完太郎（国際武道大学）

【日 時】2018年8月27日（月）19:00～21:00（終了後は「景宜軒」。閉店まで盛り上がる）
【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ／話題提供者】FIFA ワールドカップ討論会—ロシア大会での事例をめぐって

1. 日本 vs ポーランド戦における日本代表（西野監督）の選択について／中塚義実（筑波大附属高校）
2. VAR（ビデオアシスタントレフェリー）の導入について／小幡真一郎（JFA1級インストラクター）
3. 「パブリックビューイング」をめぐって／松井完太郎（国際武道大学）

【参加者（会員・メンバー）15名】

大河原誠二（桐窓サッカークラブ）、奥崎覚（Qoly）、小幡真一郎（(公財)日本サッカー協会）、
笠野英弘（山梨学院大学）、木村康子（ライター）、小池靖（サッカースポーツ少年団コーチ/在さい
たま）、斎藤芳（桜丘中学高等学校）、笹原勉（日揮）、嶋崎雅規（国際武道大学）、
白井久明（弁護士）、徳田仁（株セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、本多克己（株シックス）、
皆川宥子（東京大学）、守屋俊英（世田谷サッカー協会）、

【参加者（未会員）5名】

鈴木崇正（NEC マネジメントパートナー）、松井完太郎（国際武道大学）、守屋佐栄、
済木崇、国島栄市

【報告書作成者】田崎 蒼（国際武道大学）

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません（ご本人の了解が得られた範囲で公開しています）

1. 日本 vs ポーランド戦における日本代表（西野監督）の選択について 中塚義実（筑波大附属高校）

グループステージ最終戦をめぐっては過去の大会からいろいろあった（資料①）。86年大会から、最終戦は同時刻キックオフとなったが、これは82年スペイン大会での“事件”が影響しているだろう。1次リーグ、優勝候補の西ドイツが初戦でアルジェリアに負ける大波乱。最終節でアルジェリアの試合が先に終わり、結果を知った状態で西ドイツとオーストリアの試合が行われた。無気力試合と言えるゲームは1-0で西ドイツが勝利し、その両国が1次ラウンドを突破。アルジェリアは突破できなかった。78年大会に戻ると、2次リーグ（74年、78年、82年は2次ラウンドも総当たり戦で行われた）最終節で同じようなことが起こり、ブラジル対ポーランドの試合結果の4時間後にアルゼンチンとペルーの試合が行われ、アルゼンチンが6点取って決勝に進出した。八百長ではないかという話が当時からあった。

最終節の開始時刻を合わせるようになったのは86年大会から。予選も同様である。資料におまけとしてつけた94年アメリカ大会アジア最終予選は、最終節、同時刻でスタートした3試合の終了時刻が少しずれていたという話。日本とイラクの試合経過は「日本が2-1でリード」として韓国 vs 北朝鮮の会場に伝わったまま試合終了。韓国は3-0で勝利するが誰も喜んでいない。イラクが追い付いて2-2となって試合終了との連絡が入って韓国選手は大喜び。「ドーハの悲劇」の反対側で起きていたこと話で、韓国のアメリカ大会出場が決まり、2002年大会への正式立候補につながったという話。

ここで、大会後のBS番組に田嶋幸三会長が出演した映像をみてみましょう（日本 vs ポーランド戦のラスト10分の戦い方について「多くの方からご意見をいただいた」ことが披露され、「日本はこういうことができるようになった」とのポジティブなとらえ方が述べられた）。

日本のメディアは「日本はここまでできるようになった」と肯定的に捉える報道がほとんどだった。その中で朝日新聞の忠鉢信一氏が「規範」守らぬ西野監督 世界のサッカーを敵に回した」と題する記事を紙上に展開した。大手メディアにおける厳しい意見は忠鉢氏ぐらいか。その忠鉢氏に対してネット上では「朝日はいつも上から目線だ」というような書き込みもあった。誰もが情報発信者になれる時代。ネット上では国内外からさまざまな見解があふれかえっている（資料②参照）。

正解や結論を出すわけではないが、自由に話し合きましょう。

<ディスカッション①>

笠野：未来のためには今はしょうがないと言われるがいつになったら目的に到達するのか。スポーツはもともと楽しいものである。しかし、日本のテレビは肯定的にとらえる。では、勝つためには楽しくなくてもいいのかと思う。ベルギー戦のような戦い方をポーランド戦でやれば負けても多くの人がその時間を楽しめたのではないか。結果的に「良かった」で終わってしまっていることが問題。

徳田：気温が関係しているのではないか。（当日6/28の気温は35℃以上、ピッチ上は40℃以上あったと考えられる）、西野さんは、単にフェアプレーポイントだけを考えたのではなく、気温など様々な点を考慮してこの選択をしたのではないか。

参加者：勝つためにはしょうがない。見ている人が勝つことで楽しめればそれでいいと思う。

笠野：そもそも勝ちという結果でしか楽しめなくなっている日本人が増えたことが問題である。内容

が大事。時間を楽しむことがスポーツのいいところである。

参加者：サッカーは持っているボールをゴールに入れることが目的であり醍醐味であるが、すべてのプレーがそうである必要はない。状況に応じたプレーを選択することも大事なのではないか。

参加者：相手が攻めてきているのをかわすというところに面白さがあるが、ポーランド戦は、攻めてこない相手にただ何もなかった。ただ、周りの環境（フェアプレーポイントなど）もあるので難しい。

中塚：一つのゲームとして考えるなら、負けている試合に勝ちにいかないのは、そもそもゲームの理念に反する。しかし一つのトーナメント（大会）として考えると、この選択はありだと思う。ポーランド戦で選手を大幅に入れ替えたことからわかるように、最終戦に勝つことだけでなく、1次ラウンドを突破した上で次のベルギー戦に全力で臨むためのトーナメント全体の戦い方として、ポーランド戦のラスト10分をとらえる必要があるだろう。けど、やはりこれは王道ではない。あの場面を見て思い出したのは、1982年スペイン大会のブラジルの初戦。ソ連に先制されたブラジルが、後半、すばらしいゴールで2点を取ってひっくり返して2-1。スタンドもお祭り騒ぎの中、残り時間をブラジルは、相手を取りに来るのをいなしながらボール回しを楽しんでいた。けどただ回すだけでなく、決定的なチャンスまで作っていた。こういうのがフットボールの王道だと思う。そこを基準に考えると、日本対ポーランドの試合は見苦しいなと思う。

守屋：最後に一つだけ。78年のアルゼンチン対ペルーの試合、ペルーのキーパーの親がアルゼンチン人でした。

【資料①過去の大会でいろいろあり、1986年から1次リーグ最終戦は同時刻開催となった】

■1978年アルゼンチン大会

・16チーム出場。4チーム×4グループの1次リーグ。上位2チームが2次リーグに進出。2次リーグの1位同士が決勝（1974も同様）

・2次リーグ B組

6/14 16：45 ブラジル 3-0 ペルー 19：15 アルゼンチン 2-0 ポーランド

6/18 13：45 ポーランド 1-0 ペルー 19：15 ブラジル 0-0 アルゼンチン

6/21 16：45 ブラジル 3-1 ポーランド 19：15 アルゼンチン 6-0 ペルー

※ブラジルの結果を知って最終戦に臨んだアルゼンチンが有利とされ、八百長疑惑も報じられた

	アルゼンチン	ブラジル	ポーランド	ペルー	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
アルゼンチン		△0-0	○2-0	○6-0	5	2	1	0	8	0	8
ブラジル	△0-0		○3-1	○3-0	5	2	1	0	6	1	5
ポーランド	●0-2	●1-3		○1-0	2	1	0	2	2	5	-3
ペルー	●0-6	●0-3	●0-1		0	0	0	3	0	10	-10

■1982年スペイン大会

・24チーム出場。4チーム×6グループの1次リーグ。上位2チームが2次リーグに進出。3チーム×4グループの2次リーグ。首位が準決勝進出。

・1次リーグ グループ2

6/16 17：15 西ドイツ 1-2 アルジェリア 6/17 17：15 チリ 0-1 オーストリア

6/20 17：15 西ドイツ 4-1 チリ 6/21 17：15 アルジェリア 0-2 オーストリア

6/24 17：15 アルジェリア 3-2 チリ 6/25 17：15 西ドイツ 1-0 オーストリア

※開始10分に西ドイツがゴール。このまま終われば西ドイツとオーストリアがともに2次リーグ進出。両チームはこのままスコアを動かすことはなかった。（アルジェリアは得失点差で涙をのんだ）

	西ドイツ	オーストリア	アルジェリア	チリ	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
西ドイツ		○1-0	●1-2	○4-1	4	2	0	1	6	3	3
オーストリア	●0-1		○2-0	○1-0	4	2	0	1	3	1	2
アルジェリア	○2-1	●0-2		○3-2	4	2	0	1	5	5	0
チリ	●1-4	●0-1	●2-3		0	0	0	3	3	8	-5

■1986年メキシコ大会

・24チーム出場。4チーム×6グループの1次リーグ。上位2チームと、3位のうち成績上位の4チーム、計16チームが2次ラウンドに進出。ここからノックアウト方式。この大会から1次リーグ最終戦のキックオフ時刻は統一された。

■おまけ：1994アメリカ大会アジア最終予選

- ・エントリー147/予選参加130 → 本大会24。アジアは2枠
- ・1次予選を勝ち上がった6か国がカタールで総当たり戦。1次予選の日本は、タイ、バングラデシュ、スリランカ、UAEとホーム&アウェイ。7勝1分で最終予選進出（UAEとアウエーで引き分け）
- ・最終予選は6チーム総当たり
- ・最終戦は同時刻キックオフ。日本 2-2 イラクより数分早く終了した他会場の結果が、サウジアラビ

ア 4-3 イラン、韓国 3-0 北朝鮮となり、サウジアラビアと韓国が本大会出場、得失点差で韓国に及ばず3位に転落した日本は出場権を逃した。「日本リード」を聞かされていた韓国の選手達は勝利後もうつむいていたが、「日本同点、試合終了」の結果を知ると一転して歓喜に包まれた。

・最終予選における日本の結果は次のとおり。

- 10月15日 △0-0 サウジアラビア
- 10月18日 ●1-2 イラン
- 10月21日 ○3-0 北朝鮮
- 10月25日 ○1-0 韓国
- 10月28日 △2-2 イラク

当時の勝点は、勝2、分1、負0。同勝点の場合、得失点差、総得点、当該国間の対戦結果の順で順位を決した。

	サウジ	韓国	日本	イラク	イラン	北朝鮮	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
サウジアラビア		△1-1	△0-0	△1-1	○4-3	○2-1	7	2	3	0	8	6	2
韓国	△1-1		●0-1	△2-2	○3-0	○3-0	6	2	2	1	9	4	5
日本	△0-0	○1-0		△2-2	●1-2	○3-0	6	2	2	1	7	4	3
イラク	△1-1	△2-2	△2-2		○2-1	●2-3	5	1	3	1	9	9	0
イラン	●3-4	●0-3	○2-1	●1-2		○2-1	4	2	0	3	8	11	-3
北朝鮮	●1-2	●0-3	●0-3	○3-2	●1-2		2	1	0	4	5	12	-7

※1994 アメリカ大会（本大会）から勝点の数が変更され、勝3、分1となった（予選は勝2）。

■2018年ロシア大会

・32チーム出場。4チーム×8グループの1次ラウンド。上位2チームが2次ラウンドへ。16チームのノックアウト方式。最終戦は同時刻キックオフ。勝点、得失点差、総得点とも並んだ場合はフェアプレーポイントで順位決定。

・1次ラウンドH組は次のとおり

- 6/18 15:00 (UTC+3) コロンビア 1-2 日本 18:00 (UTC+3) ポーランド 1-2 セネガル
- 6/24 20:00 (UTC+5) 日本 2-2 セネガル 21:00 (UTC+3) ポーランド 0-3 コロンビア
- 6/28 17:00 (UTC+3) 日本 0-1 ポーランド 18:00 (UTC+4) セネガル 0-1 コロンビア

	コロンビア	日本	セネガル	ポーランド	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
コロンビア		●1-2	○1-0	○3-0	6	2	0	1	5	2	3
日本	○2-1		△2-2	●0-1	4	1	1	1	4	4	0
セネガル	●0-1	△2-2		○2-1	4	1	1	1	4	4	0
ポーランド	●0-3	○1-0	●1-2		3	1	0	2	2	5	-3

【資料②いろいろな方がいろんなことを言っている】

「日本ーポーランド戦ラスト10分に海外も様々な反応」(2018年6月29日20時13分)nikkansports.com
日本代表が28日のワールドカップ(W杯)ロシア大会ポーランド戦終盤で時間稼ぎに終始したことに対し、海外でも賛否両論が巻き起こった。

<賛同派>

- 元スコットランド代表ネビン氏=英BBC放送「私はそんなフットボールは決して見たくないが、もし彼らが攻撃的に出て敗退していたら、ナイーブで愚か者だと言われただろう」
- 英サン紙「インターネット上には『警告の数も試合の一部』『ルールにのっとった行為』と評価する声も出ている」

○元イタリア代表監督のサッキ氏＝メディアセットTV「日本は紙の上では弱いチームのように思われているが、この大会でサプライズになるかもしれない」

○ボバン・FIFA副書記官＝イタリア紙ガゼッタ・デロ・スポーツ「セネガルは残念だったが、コロンビアと同様に日本にも賛辞を送る。彼らは勝ち上がるのに値するものを出した。この規則は完璧にスポーツ精神にのっとるものだ。W杯に32チームが参加する以上この規則は続くと思う。48チームになる26年からは、FIFAランキングによって決まることになるだろう」

<否定派>

●英ガーディアン紙「本当につまらない試合。喜劇的で超現実的な結末を迎えた」

●英デーリー・メール紙「試合終盤の10分間は本当に恥ずかしい内容だった」

●英BBC放送「最後に日本がしたことはW杯で誰も見たくない行動だった。FIFAの規定は恥ずべきもの。おかげで日本は世界的な笑いものになった」

●元イングランド代表主将のブッチャー氏＝英BBC放送「後味が悪い。恥ずべきだ。素晴らしいW杯が続くが、日本-ポーランド戦でちょっと汚された」

●北アイルランド代表オニール監督＝英BBC放送「82年大会の西ドイツ-オーストリア戦で同じような試合を見た。監督経験者として、他の試合の行方に運命を託すという決断にはあぜんとした。日本は次の試合では“戦って”ほしい」

●ドイツ紙ビルト「W杯で最も恥ずべき10分間」「日本は試合終盤の10分間、ただボールを回すだけ。最も悪い形でのスタンディングサッカー。誰も取りに来ないなら、こちらは何もしないという…。ポーランドも2点目を取りに行くモチベーションはゼロ。結果、22人がサッカーをやめた」

●スペイン紙マルカ「日本、火（禁じ手）を使って遊ぶ」「汚いプレーが（突破で）日本をきれいにした」

●スペイン紙スポーツ「最悪な試合。ニシノはおかしな先発で、日本をほぼほぼ1次リーグ敗退にまで追い込んだ」

●イタリア・メディアセットTV「最後の10分間、日本が全く攻撃をあきらめていたことには失望した。アンチ・スポーツ精神だ」

●ロシア紙スポーツ・エクスプレス「単なる醜悪」「日本は最後の260秒間をグラウンド中央で80本のパスを回すだけで、ポーランドは抵抗もせず座り込む選手まで出た」「日本とポーランドはサッカーにつばを吐いた」

●ロシア・マッチTV「競技を事実上、放棄した」

●ロシア大衆紙モスコフスキー・コムソモーレツ「日本は試合をひどい形で締めくくった。粘り強く戦ってきた日本がこんなことをしたのはとても残念だ」

●元ポーランド代表ルバンスキ氏「最後の10分間はひどかった。（ポーランド代表にも）がっかりした」

●ポーランド・サッカー協会のボニエク会長「リードされている日本代表が自ら負けを選んだ。こんな試合は初めてだ。試合とは呼べない内容だった」

●ブラジル紙グローボ「皮肉にもフェアプレーが決定的な要因となった。最後の10分は正反対のことをして勝負を回避し、時間稼ぎをしたにもかかわらず」「プロサッカーでは結果が全てだが、日本は0-1のスコアより多くの物を失った」

●オーストラリア紙ヘラルド・サン「ラッキージャパン」

●元韓国代表FW安貞桓（アン・ジョンファン）＝韓国MBC「攻撃を1分間しなければファウルになる規則をつくらなければいけない。韓国は美しく敗退したが、日本は醜く16強に進出した」

2. VAR (ビデオアシスタントレフェリー) の導入について

小幡真一郎 (JFA1級インストラクター)

VAR や AVAR (アシスタント VAR) について日本でも 2020 年の東京オリンピックを目指して実験をしている。AAR (追加副審) についても Jリーグでやっている。成果はまだ出ていないが、暴力行為や悪質なプレー、PK などの抑止力になるのは事実である。AAR に関しては、近くで見られるのは選手にとってストレスになる。

VAR の目的は「試合を再審判しない」こと。対象は「判定が明白な間違いであること」と「見逃された重大な事象」であること。この二つが対象になる。FIFA は「最小の干渉で最大の利益を得た」。今回のデータでいくと、判定の精度が約 90% から 98% まで上がった。

FIFA は、①主審は常に決定しなければならない、②主審のみがレビューを開始できる、③レビューに時間的制約はないー正確さは速さより重要である、④主審は透明性を確保するために可能な限りレビューは目に見えるところに留まる、⑤最終決定は主審によって行われる、⑥元の決定がはっきりした明白な間違いであるときのみ変更される、という原則を掲げてロシアワールドカップに向かった。選手にチャレンジ権はない。

VAR が関わる事象として、①得点、②PK、③一発退場、④退場・警告などの人間違いの 4 つが挙げられている。

導入して実際はどうだったのか。

64 ゲームのうち 455 シーンチェックをしたと FIFA は言っている。1 試合につき 7.1 回シーンをチェックした。レビューが 20 シーン。決勝トーナメントに入るとチェックが減少した。審判がうまくなった。ばらつきがなくなった。レビューしたのは 20 シーン。

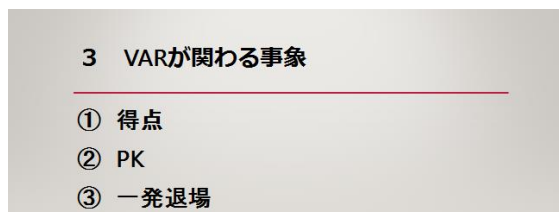
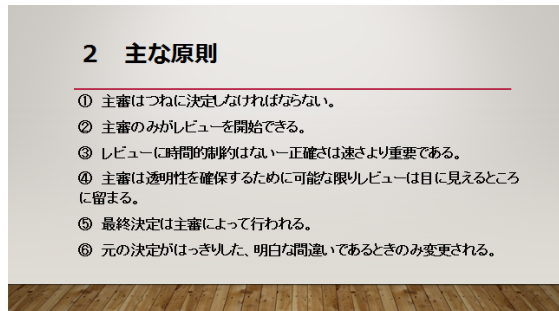
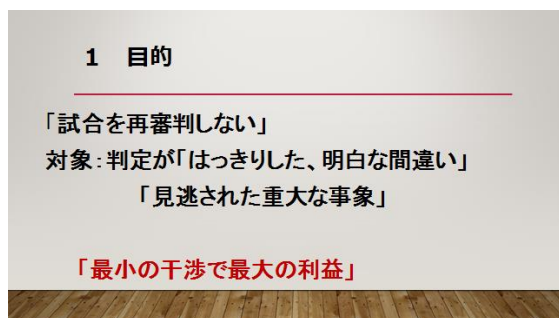
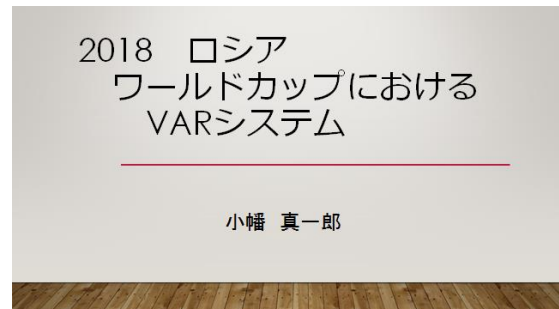
今回はこんなシーンを用意した。

(1 シーン目)。主審はノーという判定をした。ペナルティエリアで接触があったかレビューワーが 6 人で見ている。スライディングした足が相手に接触している。トリッピングの反則。結果的に VAR により PK になった。

(2 シーン目) 主審は PK を示したが、VAR からもう一度見るように示唆された。VAR は 16 台のカメラで行っている。

(3 シーン目) 副審はオフサイドの判定。副審との話しあいで審判を下した。

動画をすべて見終わったので皆さんに議論していただきたい。



<ディスカッション②>

中塚：ありがとうございます。映像を見終わったところで感想や意見ををお願いします。

嶋崎：映像で明らかになっていくことはいいことである。しかし、ラグビーで導入されているが、試合の流れがかなり止まる。見ている側は違和感がある。正確な判定は大切だが、プレイヤーや観客の立場から見たときに試合の流れを止められることに関してはどうなのか。皆さんにお聞きしたい。

小幡：サッカーはVARが用いられるのは1試合に1回あるかないかである。ラグビーは地面についたかつかないかが問われるから頻繁に使われる。

審判の面から行くと、選手ともめないという点では非常によい。選手に諦めがつく。

中塚：いま映像を改めて見ても、どちらとも取れるシーンが多いと感じる。故意であったか否かなど、ビデオで見たとしても判断が分かれるところは多いのではないかと。止めて再審するほどのメリットはない、むしろサッカーが面白くなるのではないかと危機感を感じている。

斎藤：流れが止まってしまうので、スポーツが変わってきてしまう。高校サッカーで言うと、クォーリングブレイクが戦術を整える時間になってしまうのではないかと。もう一点は、1966年ワールドカップ決勝、イングランド対西ドイツの試合の判定間違いなどの歴史がこれからなくなってしまうと思うと寂しい。

参加者：審判に対するブーイングがなくなるのはいいことだが、ロマン派としてどっちだったか議論するのもサッカーの面白いところであり、俯瞰して見られるのは観客だけでいいのではないかと。レフェリーという言葉の意味が変わっていく。VARは2次ラウンドに入ってからでいいのではないかと。ドラマチックにならないのではないかと感じる。

参加者：Jリーグなどでファウル数や警告の数などを数値として見て、減っていることが確認できたのは、選手にとって抑止力になるのではないかと。VARを導入している環境としていない環境で差が出てきて、慣れている人たちが有利になるのではないかと。

笠野：つまらなくなるから反対。疑惑の判定をめぐって観客が議論することができるようなスポーツの醍醐味を奪ってしまうのではないかと。しかし、VARによってそのような楽しみが作られるのではないかと考えている。

木村：素人感覚で言うと、ワールドカップの期間中にVARには慣れてしまった。テレビで試合を見ている限りは特に気にはならない。ピッチレベル、選手レベルで活動をされている方に意見を聞きたい。

参加者：息子と見ていて好評だった。子供にはわかりやすい。現地の人は半々。流れが止まるのはどうかと思う。ハンドリングに関しては寛容でいいと思う。

鈴木：ビデオ判定の議論は昔からあり、同じような議論が繰り返されている。IFAB（国際サッカー評

議会) はもともとビデオ判定の導入に関して保守的だったのにどうして導入する態度が変わったのか。

小幡：商業主義からきているのと、オフサイドの判定が映像を見なければいけないほど、変わってきているから。イングランドの力が増えてきたのではないかと。VARの指導もFIFAではなくイングランドから指導者が来ている。

中塚：プレミアリーグでも導入されているのか。

小幡：オランダリーグは導入されているがプレミアリーグは導入されていない。

木村：なぜプレミアリーグで導入されていないのか。

小幡：VARはリーグで導入している国しかワールドカップに参加していない。

VARのみでほかの主審や副審はほかの国からも参加している。

守屋：イングランドは観客がロマン派なのではないか。

白井：ワールドカップの人気の高まり、審判が正しいジャッジをしていないといわれるときに、どう対処していくのかという問題もあるのではないかと。

斎藤：勝ち負けやひとつのプレーが選手や国のさまざまな部分に波及してくる。サッカーがビジネスにも発展してきているので、勝ち負けが大きな意味を持つてくる。

嶋崎：インカムについて、知らない情報を入れてくるアシスタントもいる。的確な情報を与えてくれるアシスタントとやるとやりやすい。

小幡：審判をやめる人が増える。結局最後はVARで裁かれるので審判が尊重されなくなる。自分がやったことをVARに変えられる。

嶋崎：ネットですぐに話題になる。たたかれる。VARからリクエストの指示が出るのか。

小幡：そうです。(耳に手を当てている場面)

嶋崎：ラグビーは、ピッチの審判からリクエストするという仕組み。審判に権限がある。

小幡：ラグビーは最後にVARが判定するのか。

嶋崎：ラグビーはレフェリーが映像を見たい状況でリクエストして最終的にレフェリーが判定を下す。

参加者：ラグビーVARはコストがどのくらいかかっているのか。(アシスタントの人数)

嶋崎：ラグビーは一人。トップリーグ以上の試合。施設の関係で大学ラグビーなどは実施していない。

中塚：この流れを食い止めることは出来ないのか。

笠野：現実として商業主義などの影響から判定をより厳密に行うことは仕方ないが、社会学を学んでいる身として変えていかなければならないと思う。大学の授業で VAR について賛否を聞いたところ 99.9%賛成だった。今の時代はテクノロジーが発展していることもあり、機械で1か0かを判定してくれることに違和感が少ない。

徳田：なぜ、次のプレーが終了してから前のプレー（かなり前のプレーの場合もある）の判定をするのかというところに違和感を覚える。次のプレーが始まる前に VAR 判定を行うべきではないか。または、いずれかのチームの監督から次のプレーが始まる前に判定に対する抗議があった時（レッドフラッグをピッチに投げ入れる等の方法で）だけ VAR を行えばよいのではないか。例えば、アメフト（NFL）では得点した時とターンオーバーした時は必ずプレイすることになっているので、タッチダウンの場面などで審判は判定が困難な場合（明確に判定ができない場合）はプレーを流し、フィールド上の判定を「得点」にします。そうすれば必ずオフィシャルのレビューが入るので誤審はなくなります。そのような方法であれば審判は VAR との役割分担ができるのではないではないでしょうか。

鈴木：VAR も人が見ている。映像が高性能になっても最後は人。他の競技でもビデオ判定などの採用が進めば、ますますロマン派を守らなければいけなくなる。AI が導入されれば判定の自動化に劇的な変化が起きると思う。

斎藤：テクノロジーを取り入れる学校で、生徒全員がアイパッドを持っており、体育祭でゴールシーンを撮った時に、順位判定で揉めた。サッカーでは八百長の防止になっている。あとから判定に異議を唱えることはなしにしなければいけない。

笠野：すごいプログラマーがいれば審判が判定している間に動画をすり替えることができるかもしれない。

小幡：若いレフェリーと経験を積んだレフェリーによって差ができてしまうので難しい。

木村：何年後かに VAR によりかなりクリーンな試合が見られるかもしれない。ローテクだから問題になるのであって、ハイテクな AI によって流れを止めないような試合ができる可能性もあると考えるが他の方はどう思うか。流れを止めない AI 審判が出てきても人間が審判をすることにこだわる理由は何か。

斎藤：今回のワールドカップで3点導入があって、1点目は VAR、2点目はハンドリング、レフェリーへの抗議に対するカードの提示。ラフなプレーの後に審判が一回止めて、試合全体をコントロールするという事は人間が行った方がいい。

小幡：たぶん VAR は続いていくと思われるが、今後 VAR とどう付き合っていくかがレフェリーの今後の課題であると考えられる。

3. 「パブリックビューイング」をめぐって

松井完太郎（国際武道大学）

今日は参加者の中に弁護士さんもいらっしゃるようですし、仲間になってくださる方がいるのではないかと期待して参りました。

スポーツの価値は「する、観る、支える」で語られます。このうち「する」と「支える」を深く論じているものには数多く接するのですが、「観る」について深く語られることが少ない印象があります。今日はパブリックビューイングを題材に「観る」について語りたいと思います。

YouTube で SONY のアフリカでの活動を観ることができます（YouTube 上で“Public Viewing in AFRICA”で検索）。2010年のFIFAワールドカップ南アフリカ大会のときに、自国のナショナルチームの試合を観戦できないというアフリカ諸国の村に、大きなスクリーンとプロジェクターを持ち込んで、パブリックビューイングをするものです。参加したアフリカの子どもたちの生き生きとした驚きと熱狂を見ていると「いい仕事しているなあ」と感じます。

みんなで生中継を同時に一緒に熱く体験する「観る」ということは、その場限りのイベントではなく、未来の「する」「支える」を担う人をつくることに繋がる重要な機会であると考えます。

しかし、この観点から言えば、日本はアフリカよりも「劣悪な環境」にあるのではないかと、というのが私の主張です。ビデオに出てくるアフリカの国では、テレビ普及率が低く、しかも普及しているテレビも14インチ程度の画面しかないので、街頭テレビ化の期待ができない。だから、このアフリカの子どもたちには、パブリックビューイングでみんなで応援する機会が与えられる。一方、日本では一家にテレビが数台あって普及率が100%を超えている状況にあるかもしれないけれど、非商業・無料のパブリックビューイングイベントにも多額のライセンス料がかけられ、日本の子どもたちは、みんなで一緒に応援する機会を事実上与えられていないのです。来年のラグビーワールドカップも再来年の東京オリンピック・パラリンピックも、電通によるFIFAワールドカップと同じようなマネジメントがされれば、学校の体育館で生徒達がパブリックビューイングすることは難しいでしょう。

告白します。私は電通メディアパートナーズに対して「パブリックビューイング」開催の手続きをせずに、学生たちと国際武道大学1114教室に於いてFIFAワールドカップロシア大会の試合をプロジェクターをつかってNHKの放送を投影し、パブリックビューイングを実施いたしました。

これまでの経緯を含めて説明させていただきます。

2014年のFIFAワールドカップの時に大阪市都島区が「都島が生んだ柿谷選手を応援しよう」と都島区在住・在勤・在学の人達を対象に非商業・無料のパブリックビューイング行う告知をホームページでしたところ、バッシングされました。非商業・無料でも5万円のライセンス料金を払わないといけなかったのです。電通メディアパートナーズは「公共団体なのに未申請・未払いは聞いたことがない」とコメントしました。実は、多くのスポーツ少年団サッカーチームなどが小学校の体育館を借りて非商業・無料のパブリックビューイングを開いていて、「子どもたちのニッポン！コールで盛り上がりました」などとホームページにアップされていたのですが、騒動が起こった直後に次々と消されていきました。

ここで「パブリックビューイング」とはなんのでしょうか。当時の電通メディアパートナーズが運営するサイトには、以下のように「パブリックビューイング」そして「非商業イベント」の定義が示さ

れていました。

パブリックビューイングイベントとは、
個人の住居以外の場所に
大型テレビ・モニターを設置して
集客を目的として
本大会の映像をライブ中継することをいいます。

非商業イベント＝
自治体。地域コミュニティーなどの非営利団体が主催し、
地域住民が無料で集まって楽しむためのイベント

当時、国際武道大学の1114教室でパブリックビューイングをしましたが、それは彼らのいう「非商業」「パブリックビューイング」イベントにあたるのでしょうか。1114教室には人は住んでいませんので「個人の住居以外の場所に」に当たります。「モニターを設置」もなされています。国際武道大学は非営利団体なので「非商業イベント」にも該当しそうです。

しかし、外れる要件がありました。集まったのは「地域住民」ではなく、私の授業の補講を受講する学生に限定しており、「集客を目的」にしていない点です。当時、電通メディアパートナーズに電話して彼らの言う「パブリックビューイング」に当たらないことを確認しました。パブリックビューイングの開催について学生たちからは支持されましたが、私としては忸怩たる思いがありました。学生たちがサッカー指導する地域の子どもたち、その保護者にも参加してもらいたかったからです。

2015年FIFA女子ワールドカップの時の電通によるパブリックビューイング実施ガイドラインでは、非営利・無償であっても「映像を拡大する特別の装置」を使った場合はライセンス料5万円と設定されました。このときも電話をかけて交渉して、授業の補講を受講する学生に限定すればOKということになりました。

「映像を拡大する特別の装置」とは、今では公立学校の教室にも設置されているプロジェクターのことですが、この難しい表現は著作権法100条の文言です。

著作権法100条 放送事業者は、そのテレビジョン放送又はこれを受信して行なう有線放送を受信して、映像を拡大する特別の装置を用いてその放送を公に伝達する権利を専有する。

実は私は以前から、この著作権法100条の問題はクリアしておかないと訴えられる危険があると意識していて、プロジェクターを使う時は放送事業者（テレビ局）に必ず承諾を取るようになっていました。しかし当時、いずれのテレビ局も100条の問題を意識しておらず、とにかく教育機関は著作権法35条でOKという理解でした。

このような状況では、私のように電話で交渉し、内容を忘れないように録音するアホは、パブリックビューイングをやりますよ。でも公立中学校の校長先生達には危険すぎて企画開催できないと思います。今変えないと、来年のラグビーワールドカップ、再来年のオリンピック・パラリンピックでは、体育館に生徒が集合して応援する体験を、日本の子どもたちにさせることはできないでしょう。たとえば「学校で生徒・その家族を対象にする時はOK」と最初から明示するべきです。スポーツを普及

するミッションを持った組織、もしくは、そのミッションを託された組織が明確な基準を提示すべきだと思います。

ロシア大会アジア最終予選における電通のパブリックビューイング実施ガイドラインでは、一気にライセンス料が値上がりし、「映像を拡大する特別の装置」を使うと非営利・無償でも最低でも約 29 万円のライセンス料を支払わなければいけないことが示されました。

そして、ロシア大会本戦では、非営利かつ無償でパブリックビューイングをやっても「映像を拡大する特別の装置」を使えば、最低でも 30 万円のライセンス料が必要であることが、電通メディアパートナーズの運営するサイトに掲出されました。これでは、非営利かつ無償のパブリックビューイングを企画する人は、なかなかいなかったと思います。

NHK に著作権法 100 条の許諾をもらってから、電通メディアパートナーズに電話をかけて交渉しました。高圧的な対応を受けたと私は感じています。ここでみなさんと鑑賞することもできますが、止めておきましょう。彼らのパブリックビューイング定義のどの要件が欠けるのか、見解に相違がありましたが、どちらにしろ、私が実施するパブリックビューイングが彼らの言う「パブリックビューイング」に当たらないことが確認できたので、反論はせずに電話を切りました。

FIFA に、電通との契約内容の詳細について聞きましたが、教えてもらえませんでした。しかし色々と感じるところがありました。

FIFA のサイトをお訪ねください。ロシア大会パブリックビューイングに関する一般規則が公開されています。電通のようなライセンサーがいる国以外では、全く別のゆるやかな基準でパブリックビューイングを認めているのです。すなわち、参加者が 5000 人以下の非商業イベントは許可なく開催 OK。しかも、パブやクラブ等でも、見せることに特別料金を取らなければ、非商業イベントと認められることが規定されています。

日本で、非商業・無償パブリックビューイングに対しても高額ライセンス料を設定してコントロールすることを FIFA が主導的に選択した合理的理由が、私には思いつきません。

ロシア大会開幕時に、私は学会でポーランドにいました。これはグダニスクの大型商業施設での「非商業」パブリックビューイングの写真です。参加している人々が各自の家で見ればライセンス料は発生しないが、集まった途端に 30 万円払えでは納得しないのが他国でしょう。

私は、電通が金の亡者だと主張しているのではありません。もっと上手にマネタイズする方法があるのではないかと感じているのです。みんなが熱狂すればコンテンツの価値は上がるはずで、子どもたちが学校教育の中でパブリックビューイング体験することを最初から許すことが、未来の顧客を生むことに繋がります。たとえ FIFA から、日本だけに適用する厳しい基準を押し付けられそうになっても抵抗すべきではないかと思うのです。少なくとも、国際武道大学でのパブリックビューイングがライセンス料の必要な「パブリックビューイング」に当たらないのだから、電通が「学校ではこういうカタチでやればいいよ」と明示できたと思うのです。私が知る電通の社員の方々は、非常に優秀で、スポーツを心から愛する人達です。変えていただけると信じています。

<ディスカッション③>

中塚：7月末に国際武道大学にお邪魔する機会があり、松井さんからこの話をお聞きして「そんなことがあったのか」とびっくりしました。今回ぜひ話題提供していただきたいとお願いした次第です。いまの話を聞いての感想や意見をお願いします。

徳田：お葬式で亡くなった方が好きだった曲を流すと日本音楽著作権協会（JASRAC）にお金を払うことになってしまうのと似ている。営利目的でもないのにおかしな話です。

参加者：パブリックビューイングは FIFA の専売特許ではなく、彼らが勝手に定義しているだけですよ。もちろん、コンテンツの権利は FIFA が持っていると思うのですが、サッカー普及、サッカーの価値を更に高めるためにも、緩やかな一般基準で日本でもパブリックビューイングを認めてもらいたい。

参加者：視聴率のなかにパブリックビューイングに参加した方は入るのでしょうか。

松井：ビデオリサーチ社の視聴率調査の方法が変わり、タイムシフト測定もするようになりましたが、パブリックビューイングについては入らないと思います。

参加者：パブリックビューイングをやった方が視聴率が上がるという統計があればいい。

松井：番組スポンサーにとっては、パブリックビューイングは録画視聴よりもメリットが確実にあると思います。また、地域の小学校でパブリックビューイングで応援する体験を子どもたちにさせることは、未来の顧客を生むことになると思います。私は、試合前の国歌斉唱のときは起立・脱帽、試合終了時には勝ち負けに関係なくスタンディングオベーションをするというスタジアムでの観戦と同じルールを参加者に守ってもらっています。そういう儀式が「観る」スポーツを支える人を育成するのに重要だと思っています。

参加者：この間の学会で大学院生が、会場と同じ映像を切り取って、全員が同じ映像をみているので、スタジアムよりも余計一体感が高まると発言していました。

参加者：日本人はシャイなので盛り上がりには欠けるのではないのでしょうか。

松井：確かに、そこは課題です。日本人はパブリックビューイングに慣れていませんから、やはり行儀よく静かに見てしまうことも多いと思います。私共のような体育大学の場合、学生たちは比較的盛り上がりますが、部屋を真っ暗にするなど、工夫はしています。

参加者：電通に、なぜそんなマネジメントをする権利があるのですか？

松井：契約を見てはいませんが、FIFA と契約のある権利管理者だからです。権利管理者がいる国では、ゆるやかな一般規則ではなく、その権利管理者の指示に従ってくださいと FIFA もホームページに記載しています。このルールを破ると、FIFA が持っている権利を不当に利用したという損害賠償請求を受ける可能性があります。

私の場合、弁護士にも相談し、やり取りの過程は、防衛のために録音しているので訴えられても大丈夫だと考えています。

それでも不安はあります。「スポーツでいちばん重要なのはルールだよ。ルールを守らない奴はダメだよ」という類の批判に、正当な主張がかき消されるということです。「コンプライアンス」という横文字をつかって袋叩きにする。誰が決めたルールで、そのルールが正当なのかとういことを考えてもらいたい。

私が実施した「パブリックビューイング」はルールを守らないでやったものではありません。ルール規制外であることが確認されています。私の主張は、規制（ルール）の表示方法が過度な抑制効果を持ち不当であり、できれば一般基準で認めてもらえないだろうかというのですが、それを先取りしてルールを破って実施したものではありません。

中塚：来年のラグビーワールドカップ、再来年のオリンピック・パラリンピックにも関連してくる内容でした。著作権法100条を改正したり、電通のスポーツを愛する社員に理解を得るなど、様々なアプローチすることが大切です。少なくとも学校でのパブリックビューイングを許してほしいですね。スポンサーにとっては学校でテレビを通して広告が流れるので、メリットになると思います。

参加者：ネットで検索すると、この類の話は多く出てきますね。発信できるところから発信していくことが重要だと思います。

以上

議論は尽きない。続きは「景宜軒」にて